

13

豊橋

豊橋市立南部中学校

ナカジマ ヒロシ

名前

中島 浩至

○中島浩至（大清水小） 吉川和良（豊城中） 鈴木加奈絵（石巻中） 古川規恵（青陵中）
 手島可奈子（高師台中） 金子友紀（東部中） 石川翔太（南部中） 廣瀬健太郎（東陵中）
 岡本凌（二川中） 千田傑（二川中） 森下茉弥（前芝中） 岩倉弘恵（本郷中）
 権田有香（牟呂中） 山崎紋（吉田方中） 鈴木達也（本郷中） 岡本雄太（石巻中）

分科会番号

1

分科会名

国語教育(文学その他)

研究題目

異なる視点から作品を学び合い、自分のもつ読みを深める生徒の育成
 —中学校第3学年国語科 「故郷」(魯迅)の実践を通して—

1 主題設定の理由

本学級の生徒は、2年時の「走れメロス」において、対人物であるディオニス目線で作品を見直すことで、描かれていない場面や行間に込められた心情にまで考えを広げた経験をもつ。視点を変えることや批判的な読み方をすることで作品の理解が深まることに気がついている。5月に行った「握手」では、結末部分の指言葉の意味を単に「叱る」とせず、タブレット端末で類義語を探したり、冒頭や回想から行動の意味について考え直したりすることで、水くささを感じつつ悲しみに沈む語り手の心情を読むことができた。はじめは、教材の終わり方の意味に首をかしげていたものの、納得解にたどり着いた後、「読めたって感じがした」と記述した生徒もいた。読むことの実感を繰り返しながら、はっきりと本文の言動に表れた心情だけでなく、書かれていないからこそ読むことのできる心理や、舞台の設定から想像できる人間関係などを、自分の言葉で表現できる生徒が増えてきた。ここからさらに、一つの問いについて考えを比べ合うのではなく、別の視点から生まれた読みを出合わせることで、作品理解はより広く、深くなる可能性があることに気づいてほしいと考えた。

そこで、目ざす生徒像を次のように設定した。

目ざす生徒像

異なる視点から作品を学び合い、自分のもつ読みを深める生徒の育成

2 実践の構想**(1) 仮説**

物語・小説を読むことは、思考力・判断力・表現力を養い、言語感覚を豊かにすることにつながり、これからの社会を生きる子どもたちにとって重要な意義をもつ。「読む」とは内容の表面的な解釈で終わらず、言葉の特徴や使い方を吟味したり、表現の効果を考えたりすることをも意味する。そういった力をつけるためには、協働的な読解経験を繰り返したり、一人で思考する経験を増やしたりすることはもちろん、自分の読解内容やアイデアを他者に伝えていくことが大切であると考えた。自分と他者の読みを結びつけ考えを再形成していく心構えを常にもつことは、主体的・対話的で深い学びにつながり、その交流が、また違った「読み」の力につながる可

能性があるだろう。

他者に考えを伝えるためには、その目的が必要になる。一人読みの時点で複数の視点を提示することで、自分の読みこそが課題解決に不可欠であるという自覚が生まれ、考えを伝える目的につながるであろう。一読したときには表面的にしか理解できなかった対象や、うまく表現できなかった解釈について、問いや互いの「読みの視点」を踏まえることで、仲間同士で「どういうこと?」「もう一回言って」と尋ね合い、言葉を積み重ねながら理解を深めていくと考えた。以上のことから、次のような仮説を設定した。

一人一人が自分の役割を明確にした読みをすることで、「聞きたい」「話したい」という主体的な学びが生まれ、解釈の比べ合いや課題への活発な話し合いを通して作品理解を深めることができるであろう。

(2) 手だて

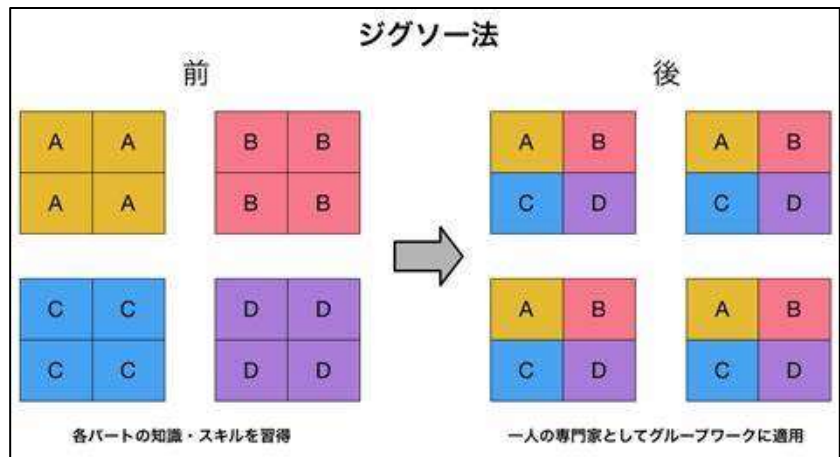
①課題(読みのゴール)の明確化

答えを知りたい・考えたいと思う課題がなければ、読みは深まっていけない。最後の場面の「私」の語りに焦点を当て、「この話はグッドエンドかバッドエンドか。」という問いを読みのはじめに行う。二者択一の問いは、生徒にとって考えやすい発問であると同時に、根拠も含め、意見が割れやすい発問であるとも言える。異なる意見が出たときの生徒の言葉を拾い、終わり方の解釈をするため、物語全体を丁寧に読んでいこうという課題設定につなげ仮説にせまろうと考えた。

②知識構成型ジグソー法

一人では十分な答えが出ない課題に対して、異なる視点から仲間との対話を通してアプローチすることで、生徒一人一人の自らの理解を深める授業形態である。はじめに小グループに分かれ、ある視点について考える(エキスパート活動)。その後グループを組みかえ、異なる視点の「エキスパート活動」を行ったメンバーどうしのグループを組む。こうすることで、それぞれの視点に対して、深い考えをもっているのは「自分だけ」という状況が生じる。すると、「伝えたい」「聞きたい」という自覚が高まり、活発な話し合い(ジグソー活動)が期待できる。

自分の意見にこだわりをもって、解釈を比べ合うことで、多くの生徒が話し合いに参加した手ごたえをもつとともに、読みを深めた実感を味わうことができるのではないかと考えた。



3 授業をすすめるにあたって

(1) 単元目標

- 人物の心情を表す効果的な語句や表現に気づき、物語の主題を読み取ることができる。
(知識・技能)
- 文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えることができる。
(思考・判断・表現)
- 自分のものの見方や考え方を広げたり深めたりするために、自分の考えをすすんで友達に説明したり質問したりして課題を解決しようとしている。
(主体的に学習に取り組む態度)

(2) 単元構想(6時間 本時5/6)

故郷ってどんな話かな ①

- ・中国の話なんだね。 ・長くてよくわからなかったな。 ・難しい言葉も多かったよ。
- ・ヤンおばさんがいやなやつだったよ。 ・時間がたって人が変わってしまった人物が多い。
- ・結局ルントウとは仲直りできなかったの。 ・終わり方が寂しいね。 ・前向きな終わり方、かなあ。

グッドエンド? それとも バッドエンド? ②~⑤

感想

感想交流&課題設定②③

深掘りしたいポイント

- ・ヤンおばさん、いやなやつだなあ。
- ・ルントウと私の関係が変わるのは寂しいよ。
- ・わからない言葉ばかりだ。意味や時代背景、作者について調べてみよう。
- ・紺碧の空、金色の月という情景が二回出てくる。なぜ最後にその情景描写をもってきたのだろう。
- ・魯迅は文学で民衆にうったえ続けた人なんだね。この話は何を伝えたかったのかな。

- ・ルントウやヤンおばさんはなぜ昔とこんなにも変わってしまったのだろう。
- ・離郷が名残惜しくないのはなぜ?
- ・希望を「偶像」と言っているね。どういうことだろう。
- ・希望をもっているの? 諦めているの?
- ・最後によくわからないことを言い始めたね。何を言いたいのかな。

最後、「私」は何が言いたいのかな

「故郷」を読み深めよう ④⑤(本時2/2)

エキスパートA

「私」から見た、故郷の変化

- ・昔は、坊ちゃんでいられて、にぎやかで、ルントウという英雄もいる輝かしい故郷だったね。
- ・今は、思わず寂しくなるほどわびしいよ。家もひっそり閑だね。
- ・英雄が霞んでしまうのはたまらなく悲しいと言っているね。

エキスパートB

ヤンおばさんの変化

- ・美人な豆腐屋小町から、コンパスに変化してしまったね。
- ・卑屈で、嫌味な人になってしまったよ。泥棒もしているね。
- ・ルントウ同様、時代の影響で変わってしまったのかな
- ・心に余裕がなさそう。主人公同様、社会への不安があるのだろう。

・寂しい変化をしたルントウだけど、ルントウ目線でみてみると、感情移入できる部分もあるよ。本文にはないけれど、ヤンおばさんにもそういう部分があるのかもしれないね。

・「私」から見た故郷の変化は、単純に没落したという意味だけでなく、美しい故郷の象徴たるルントウへの失望からくるものかもしれない。

・それぞれのエキスパートで話す物語の内容が理解できて、「故郷」が面白く感じられるぞ。

エキスパートC

「私」の変化

- ・ひげなど、金持ちっぽい身なりをしている。ひがみたくもなるかも。
- ・「ぼく」から「私」に変わっているよ。
- ・故郷に対する思いが変わっている。最後は「名残惜しい気はしない」って言っている。
- ・ルントウに対する思いも変わっている。失望しているよ。

エキスパートD

ルントウの変化

- ・話し方が全然ちがう。昔は「おまえ」って言っていた相手に「旦那様!」だもんなあ。
- ・兄弟の仲だったのにね。
- ・松の幹のような手や石像のようなしわは、潤いがなくて不格好な表れだね。
- ・小英雄はでくのぼう&盗人になってしまったね。
- ・「私」は寂しかったろうな。

最後、「私」は何が言いたいのかな⑥

- ・誰かが行動に移さなければ、希望というものは実現しないという考え方に納得した。
- ・共に行動する人が多くなってはじめて道ができる、というのは確かにとも思うが、一人でも道はできると思う。その最初の一人になる気概が、新しい社会や明るい未来には必要なのではないか。
- ・次世代が、自分たちのようにはならないよう、社会を変えていかねばならないという決意ではないか。

わからなかった末尾部分を、みんなとの話し合いによって解釈できてよかった。

作者と関わらせて読むと、作品理解が深まって面白かった。

4 授業の実際

(1) 「故郷」ってグッドエンド？バッドエンド？

初読の感想では、ヤンおばさんへの文句やルントウと「私」についての嘆きなど人物に関する意見が多く挙げられた。しかし最も多かったのは、最後の場面や作品全体に対して「よくわからなかった。」という言葉だった。「この話はグッドエンドかバッドエンドか。」と問いかけると、およそ7割がグッドエンド、3割はバッドエンドという結果となった。バッドエンド派の理由「故郷に失望しているから」「寂しそうな終わりだから」にも、グッドエンド派の理由「希望や未来について考えているから前向きな感じがする」にも否定する意見は出ず、作品の捉えが曖昧な様子がみてとれた。出来事を大まかには捉えられていたものの、時代背景への理解不足もあり、「どういう意図の終わり方なのか」「最後『私』は何が言いたいのか」という疑問は残ったままとなった。終わり方を解釈するという読みのゴールに向かって、作品全体を読んでいこうと伝えることで、物語文を読解したいという主体的な態度につながった。(手だて①)

(2) 「故郷」を読み深めよう

「この結末にはどのような意味があるのか」という課題を解決するため、初読の感想で出た「ヤンおばさん」「ルントウ」「私」の変化、そして「私から見た故郷の変化」を視点に読むエキスパートに分け、ジグソー法を用いて授業を展開した。長文読解に苦手意識のある生徒は「ヤンおばさんの変化」「ルントウの変化」を選んでしたが、わかりやすく描かれている変化を、図や言葉で整理していくにつれ、「どうしてこんなに変わっちゃったのかな。」と、物語の核となる方向へ思考を働かせる姿があった。エキスパート活動で学んだ一人読みをジグソー班で交流した際は、ヤンおばさんやルントウの細かい変化の分析とともに、「私」目線で描かれているため初読では見落としがちだった「私」自身の変化を共有し、「故郷」全体の変化を話し合うことができた。視点は違えど、思考の方向性が一致する部分もあり、共感したり問いかけあったりと活発な話し合いをする姿があった(手だて②)

『私』の変化」を担当した生徒Cは、ルントウとの関係が故郷への思いに変化を与えていることをくみ取ってはいるが、最後の「名残惜しい気はしない」を文字通り受け取り、前向きな気持ちになっていることに違和感を覚えていた。(資料1)その後、ジグソー活動をする中で、情景描写を根拠に「終わりの場面でも故郷への気持ちは冷めている」とするエキスパートAの生徒と教科書や生徒Cの書いた図を比べながら話し合うことで、「ルントウとの関係の変化が、故郷や自分たちの関係への諦観や悲しみにつながっている」のであると気づいた。(資料2)「名残惜しい気はしない」を、「諦め」に近い意味合いとして捉え直すことで、曖昧だった作品の結末部分を解釈することにつながった。

資料1 生徒Cのエキスパート活動時点でのワークシート

エキスパート班は？

C

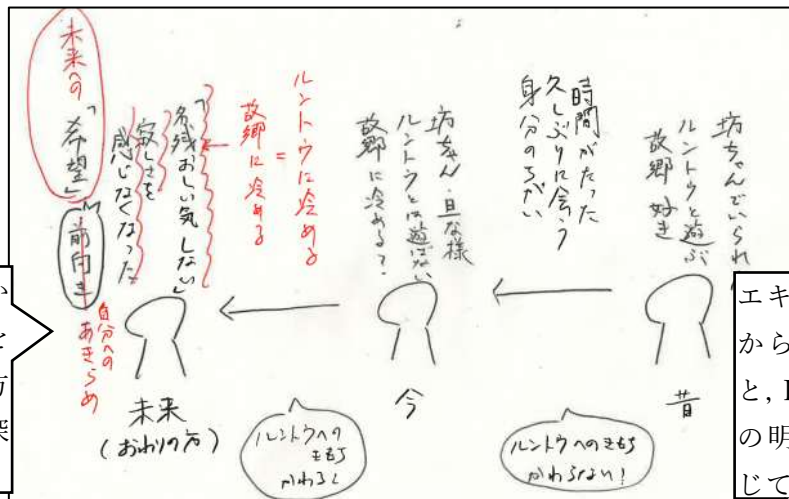
A 「私」から見た故郷の変化

B ヤンおばさんの変化

C 「私」の変化

D ルントウの変化

一人で！ ↓ ②同じエキスパートグループで！！



自分たちの世代から、未来へと思考を切り替えた終わり方であると、読みを深めた。

エキスパート A の「私からみた故郷の変化」と、D「ルントウの変化」の明確なつながりを感じている。

資料2 ジグソー活動を終えた生徒 C のワークシート

A = D ?

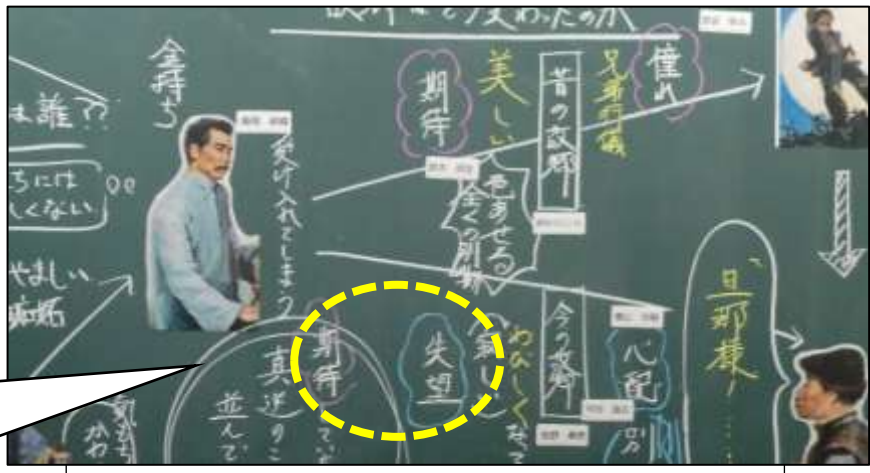
また、話し合いの中で、『私』の身なりや言動を考えれば、ヤンおばさんが嫉妬するのも無理はない。」「相手の対応に非がある言い方をしているが、『私』からルントウに声をかければよかったのに。」などの意見が出た。作品を別視点から見直すことで、人物設定や心情を読み深める意見であるといえる。(資料3)

- C: 友人を失って故郷がどんどん色あせてくから、「私」はさみしかったらなあ。
- B: でもさ、「私」みたいなお金持ちのえらいやつがこのこ帰ってきたら、嫌味の一つも言いたくなるよね、ヤンおばさんは。
- D: ルントウだって、子だくさんだし農業が思うようにいっていないし、心の余裕がなさそうだよ。
- B: 「私」から声をかければルントウは救われたかもしれないよね。
- C: 相手が変わってしまったって言うけど、周りから見たら「私」も変わっているからなあ。

資料3 生徒 C と、B・D の交流

ジグソー活動中、「だれに共感できるか」と問いかけて出た意見を、人物相関図のように板書していくと、矢印でつながれた意見を見て、「今が暗く見えていると、昔が明るく見えてくるね。」という言葉が出た。「私」を失望たらしめているのは、過去の美しさと今の故郷とのギャップであることに改めて気づく言葉であった。また、「自分だけ置いて行かれた感じで寂しいのかな。みんな変わらざるを得なかった。」という発言にどうということかと問い返すと、「みんな時代が悪い。」と、誰もが当時の過酷な時代の被害者なのであることを感じる生徒が増えた。初読の、言葉だけを切り取って人物たちを否定していた生徒たちが、時代の被害者である人物一人一人に共感の態度をとる瞬間であったといえる。そして、中心課題に対しては、中国を批判する、作者魯迅のメッセージ性に気づく声が出た。(資料4)

人物の変化は自然なことであり、過度の期待が大きな失望を生んだという考え方から、時代に対してのメッセージ性がこめられていることに気づいた



資料4 各人物の視点から、読みを相関図にした板書

(3) 「故郷」ってグッドエンド？バッドエンド？

読みを深めてから再度、同じ発問をした。割合はグッドエンドが8割バッドエンドが2割とあまり変わらなかったが、理由は全く違っていた。「当時の読み手に、共に歩んでいこうと投げかけることで社会を変えようとしている。前向きな意見を述べておりグッドエンドだと思う。」「魯迅自身、希望をかなえられるか疑っている。迷いながら書いているからグッドではない。」立場は違えど、多くの生徒が作者魯迅が作品に込めたメッセージ性に関する意見を述べていた。生徒Cは、初読では周り同様「最後、主人公が何が言いたいかわからなかった。」と書いていたが、終末では「周りが変わってしまうさみしさを、未来の人に味わってほしくないから、作者は読み手を応援していると思う。」と、作家論的に主題にせまり、自分の考えをまじえて読み深めることができた。(資料5)この言葉を取り上げ、作者は何を言いたかったのかを考える時間を設けた。社会を変えようという作者自身の決意だという生徒や、読者への投げかけだとする生徒の意見交流は、読解のまとめとなった。

グッドエンドだと思っ
送ったけど、作者は読み手を応援していると思
思ったから。周りが変わっちゃったからさ。ササシ
と未来の人に味わってほしくないと思っ
ごせ、そういう作者も周りが変われば変わって
たり。ササしく見らんたりしたことば
わかった。

5 成果と課題

生徒自身の「気になる」からはじまるという知識構成型ジグソー法を実践したのは初めてであったが、自分だけの役割をもって話し合いに参加する生徒は楽しそうで、意欲的に読みに向かう手だてとして有効であった。はじめは語り手と同じ目線で考えた結果、各人物を否定する意見が多かったが、最後はどの人物にもそれぞれ事情があったのだと考えたり、当時の時代背景にまで目を向けたりする言葉が出たのは、読みを深めた証である。解釈が分かれる作品や読む視点の多い作品に限らず、どんな作品にも生かせる可能性のある実践であると感じた。

一方で、各視点は全くの別ものではないため、エキスパート活動の時点で、他の視点に自然に目を向けた思考をする生徒も多くいた。よい方向に働いたグループもあったが、ジグソー活動時に、すでに自分が考えているものと似ていることを伝えあうグループもあり、視点の設定方法に課題を感じた。今回は指導者が視点を提示したが、慣れてきたら、どの視点から課題へアプローチするか生徒が考えることも可能だと思う。また、今回のやり方では、個々のグループで話した内容が合っていたかわからない。机間指導して各グループの言葉を拾い、比較するなど、教師がグループの間に入ってつなぐ時間を設けるとよかった。課題を生かし、授業実践を続けていきたい。